

◆エマヌエーレ ダヴィデ ジッリオ「一つ以上の「霊性（精神性）」を併せ持つことについて～多宗教的な信仰体験をする人の心構え～」

【付録】いくつかの代表的な例

●プラトンは『国家』第7巻の中で、フィロソフィー（智への愛）は、高次元に入るためのものであり、霊魂と真理そのものの言語である、と捉えています。

●アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第10巻第7章の中で、美德（有徳な生き方）と観想は、神に近づくための言語である、と捉えています。

●聖パウロは『ローマ人への手紙』4章20節～21節、5章1節～2節の中で、信仰とは、信徒たちを結びつける言語であり、新たな主体性を創造するものである、と捉えています。

●聖アウグスティヌスは『告白』第8巻第7章の中で、信仰は神の言語であり、それが私たちが神へと導く、と述べています。

●トマス・アクイナスは『神学大全』の中で、アリストテレスの哲学とキリスト教の神学を統合し、第1部・第1問・第1条の箇所では、理性（論理）と信仰は互いに補完的な言語であると捉えました。

●十字架の聖ヨハネ（16世紀後半のスペインのカトリック司祭、神秘思想家）は『暗黒の夜（夜の歌）』第1夜と第2夜の解説部分の中で、神秘体験とは、言葉を超越した言語であり、神との深い霊的一致を導くものである、と捉えています。

●密教の伝統（真言宗等）では、マントラとムドラとマンダラは、精神性の本質を伝え実現するための基本的な象徴的言語と考えられています。

●道元禅師は『正法眼蔵』第6巻「坐禅」の中で、「坐禅」のことを心の本質を象徴する言語として解釈し、その修行が言葉や概念を超えた究極の真理を直接的に表現し顕現するものであることを強調しています。

●ルドルフ・オットー（20世紀初頭のドイツの宗教学者）は『聖なるもの』第1章「聖なるものの概念」の中で、聖なるものの体験とは、不可言のものを伝える言語である、と述べています。

●ガンディーは『私の自由のための生涯』第4章「非暴力の基礎」第3項の中で、霊性（精神性）とは、非暴力と真実の言語であり、社会変革の基盤となるものである、と述べています；ガンディーはちなみに「私はヒンドゥー教徒、私はイスラム教徒、私はユダヤ教徒、私はキリスト教徒です」とも主張していたと言われています。

●マーティン・ハイデッガー（前世紀のドイツ哲学の巨匠）は『存在と時間』第1部「存在の問い」と第2部「時間性と存在の構造」の中で、「言語」とは「存在の家」である；「霊性」は「言語」を通して表現されるものである、と述べています。

●シモーヌ・ヴェイユ（前世紀のフランス出身の女性哲学者）は『重力と恩寵』「神の愛と隣人愛」の中で、霊性（精神性）とは、他者への配慮や他者への愛の言語である、と述べています。

●チョギャム・トゥルンパ（20世紀のチベット仏教の行者で学者、詩人、芸術家）は『シャンバラ：勇者の道』の中で、儀式や瞑想などの精神的な実践は、言葉では表現できない内面の体験や深い真実を伝える象徴的なコミュニケーションの一形態とみなすことができるという考えを提唱しました。

●ダライ・ラマは『幸福への道』の中で、慈悲とは、異なる精神的な伝統（＝異なる宗教など）を結びつける普遍的な言語である、と述べています。

●ティク・ナット・ハン（ベトナムの禅僧、平和・人権活動家、詩人）は『平和は一步步』の中で、【瞑想で得られるようなクリアーな】意識とは、内なる平和を促進する精神的な言語である、と捉えています。

●池田大作は『人間革命』第2巻「仏法の普遍性」の中で、仏法は、すべての文化を超えて通じる普遍的な言語である、と述べています。

（いくつかのAIの力も借りて、それぞれの箇所の内容を纏めております）